２０２１年度　ソニー幼児教育支援プログラム「科学する心を育てる」
～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

自然が与えてくれる感動をもっと身近に

～語り合う中で繋がり、広がる世界～

社会福祉法人さがみ愛育会
幼保連携型認定こども園
愛の園ふちのべこども園

実践期間（2021 年 4 月～2021 年 8 月）
対象　　（2 歳児クラス～5 歳児クラス）

目次

1.　はじめに……p.1

2.　これまでの発見と課題から見える今年度の方向性……p.1

3.　科学する心を育むプロセス……p.3

4.　実践　～自然が与えてくれる感動をもっと身近に～……p.4

Ⅰ.池の生き物との触れ合いから ……p.4

Ⅱ.野菜の栽培をもっと身近で ……p.14

5.　まとめ……p19

6.　今後の展開……p19

7.　おわりに……p20

1．はじめに

今回でソニー幼児教育支援プログラムへの応募は４年目となる。論文にまとめるという作業を通して、新しく見えてきたことや考えがまとまってきたことは多く、この３年半はより密度の高い時間であったことを感じる。毎年エピソード記録を行い、子どもたちの小さな呟きや表情やその瞬間の雰囲気にまで注目して丁寧に記録し、共有してきたことで、保育中に職員同士で“今の瞬間いいよね”と繋がる瞬間が増えてきた。今年も子どもたちの様子を丁寧に記録し、そこにどのような育ちが見られるか考察していく。

2．これまでの発見と課題から見える今年度の方向性

・過去３年間の実践を振り返って

１年目：カブト虫や植物の栽培を通して

「なぜ？」と思ってもそこで探求が起こらず、消えていく姿があった。そこで、サークルタイムによる課題や発見の共有・チャレンジタイム（保育者が出すゲームや問題に協力して取り組む遊び）・子ども専用の発見掲示板の作成・生活のルールも自分たちで決めるなどの取り組みを行った。すると、子ども自ら「なぜ？」から課題を見出し、それに向けて試行錯誤をする姿が見られるようになった。

発見⇒　主体的かつ対話的な科学する心を持つ子どもの姿は、遊びの瞬間だけではなく、日常の生活から生まれる。

課題⇒行事や既存のルールが多いほど、子どもたちの主体性や対話の機会を阻害してしまうこともあると感じたので、本質的な部分を問い直す必要性を感じた。

２年目：宇宙をテーマにした活動を通して

園にある環境や利用できる資源について改めて職員で話し合ったところ、『宇宙』という地域性を持つことに気づく。JAXA に務める保護者から話を聞いたり、JAXA 相模原キャンパスや博物館に行って宇宙について学ぶことができた。家庭でも休日に施設を利用し、学びを深める姿が見られ、園と家庭が繋がりを持つことで学びが深まった。職員においては『宇宙』という共通のテーマを認識したことで、子どもの興味・関心をキャッチする感度やその姿を語る姿が増えた。

発見⇒　保育者が共通の視点を持つことで、子どもの想いに気づくことができ、伝え合うことでよりよい保育環境を設定できる。さらに家庭と子どもたちの姿を共有し、繋がることで子どもの興味や学びが一層深まっていく。

課題⇒園生活の中で子どもが『宇宙』にかかわることが難しく、どうしても保育者が提供する活動になる傾向が強く、発見や目標に向けた試行錯誤が起こりにくかった。また保育者が『宇宙』を意識しすぎることもあり、より大きな枠組みで共通のテーマを設定する必要性を感じた。

３年目：色水遊びと生き物の飼育を通して

身近なものから遊びを考え、好きな時に好きなだけ取り組むことで、学びが深まり、一層探求心が高まっていくことを感じた。目標に向けて試行錯誤する中で、経験から新しい課題に対する解決策を考える力が育っていた。また生き物の飼育に関しては大ムカデという“害虫“と呼ばれる生き物とのかかわりを通して、敵や害とみなしている相手にも優しい心や立場があることを知り、怖いと思いながらも餌をあげたり相手を思いやる姿があることに驚いた。

◎さらに水性ペンを使った色水遊びは子どもたちの中で伝承されるようになって３年目になるが、毎年新しい作り方が生まれており、今年度は今までで一番効率の良い方法が生まれたことに驚いた。

水性ペンを水に入れたときに、色水に変わることを発見。しかし、一つの色水を作るたびにペンが使えなくなることは困るので、絵の具の色水に変えてもらう。	どうしても水性ペンを使って色水が作りたかった子どもが花の色水作りをヒントに“手拭きの紙に水性ペンで色を塗り袋の中で揉むこと”で色水を作ることに成功。	手拭きの紙がなくなってしまった時に、ある子どもが、“ビニール袋に直接水性ペンで色を塗って揉めばいいのではないか”と試し、大成功。

発見⇒　自ら身の周りの環境に働きかけ、継続的に取り組む中で発見・学び、新しい遊びを生み出していく。それを支えるために保育者は、遊びが日々継続できるような環境を整備していくことが大切である。

課題⇒　その日限りの環境や職員の禁止が多くなると、意欲が削がれて中断されてしまうことが多く見られた。子どもたちが禁止されることなく安心して遊び込めるような環境づくりのために教材研究や見守り方について話し合う必要を感じた。

・これまでの発見と課題から見出した今年度の方向性

自然から与えられる発見・感動・教訓の大きさは計り知れず、遊びの中で学ぶときに自然とのかかわりは欠かせないものであると考えている。しかし、当園の環境はまだまだ改善の余地がある。今の環境の中にも発見や感動はあるが、“ダンゴムシしかいない環境でダンゴムシに興味を持つこと”と“多くの選択肢の中からダンゴムシに興味を持つ”状況では、環境の豊かさは後者にあると考えている。豊かな環境の中で小さな発見にも共感的まなざしを持ち、感動を分かち合いたい。

バスで１５分ほど行ったところに自然豊かな緑地もあるが、いつでも気軽に行くことはできない。緑地では心躍らせ楽しむ姿があるが、継続的な活動ではなく、その場限りの活動になってしまっている。それでは、好奇心を刺激することはできても探求心を育むことは難しいと感じている。そこで、日々過ごす園の環境が 季節の移り変わりを感じられ、様々な生き物との出会いに感動できるもの にしたいと考えた。いいものをただ取り入れるだけではなく、当園にできる持続可能な魅力的な環境づくりをしていきたい。

そこで今年度は　『自然が与えてくれる感動をもっと身近に』テーマに保育を考えていくことにした。

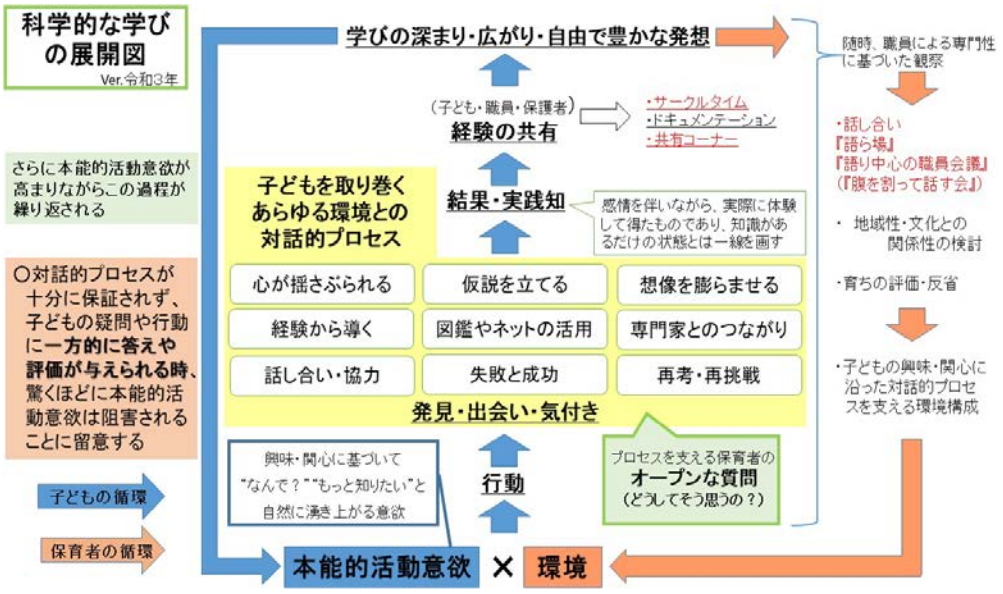
・**しかし、**これまでも上記のような課題を感じながらも、実際に行動へ移すことができずにいた。原因として、日々の忙しさに流され、思いやアイデアを共有する機会がなく、全体会議で提案しようと思っている間に熱が冷めたり、“受け入れられるか？”という不安で発言できない状況があった。そこで、自分の意見を発信し、相手の思いを知るために安心して語り合える場が必要だと考え、２つの取り組みを行った。

①**『語ら場』**：週１回、学年や領域や経験年数を問わず参加する小グループの話し合い
⇒人数が多く、ベテラン層も多い中では、若手の職員は発言することに躊躇いが見られた。そこで小さな集団の中で保育から趣味まで自由に話せる場を作った。趣味が保育に活かされたり、共有された課題について、チームを作って動く流れも生まれた。

②全体会議は“報告中心”から“話し合い中心”へ
⇒会議で研修の報告を一方的に聞くだけでは、実際の保育に活かせている実感が少なかった。保育エピソードから話し合ったり、今後の展開を考える時間を持つことにした。研修報告を行う場合は、聞いた後にそれをどのように保育に活かすことができるかグループで話し合うことをセットにした。

☆**『腹を割って話す会』**の発足
⇒①と②の取り組みを機に、職員の中で**“語り合うことで保育はよくなる”という実感が生まれた。**それでも“話し足りない“という職員が集まり『腹を割って話す会』という自主勉強会を作った。連絡アプリやZOOM を使用して書籍の内容を共有したり、保育について“思ったことを思ったときに”語り合う。主に子育てや家事が一段落した時間を利用して行った。ヨガや筋トレなど体作りをしながら参加してもよいことから『何でも話せる』と『腹筋を割る』ことをかけて『腹を割って話す会』となった。

３．科学する心を育むプロセス



昨年まで新型コロナウイルス感染症の影響で中止していたサークルタイムを再開した。サークルタイムで思いを共有し響き合って発展することは保育においてかかせないものであると改めて気づいたからである。また、職員においても発見や思いを語り合い、仲間と響き合うことが大切であると再確認したので、どちらにおいても感染予防に努めながら、話し合いの場を積極的に設けていくことにした。

４．実践　～自然が与えてくれる感動をもっと身近に～

Ⅰ．池の生き物との触れ合いから

園で様々な生き物と触れられるように、去年から池を作り始めた。池づくりは 10 種類ある OJT（ON THE　JOB TRAINING）の幼児自然塾という研究会で進めていた。作業をしていると子どもたちも「一緒にしていい？」と穴掘りなどを手伝い、「完成したらどんな生き物を入れようか？」と想像を膨らませている。防水シートを貼り終え、生き物やレイアウトを考える中、思わぬ形で池の活動が始まる。

・エピソード１　『アメンボは蚊の仲間？』（年中児・年長児）４月～６月

池が完成しないまま迎えた新年度。池から楽しそうな声が聞こえる。連日の雨で水が溜まり、木が橋のようにかかってなんとも楽しそうな遊び場になっている。「俺なら行けるよ！」と一人が渡り始めると他の子どもたちも渡り始めた。時々落ちてしまうことがあるが、それがまた楽しいようで大喜びしている。池にはまだ生き物はいないが、園庭で人気の遊び場となった。

４月中頃、橋を渡りに行った年中のＹさんが「アメンボ！」と声をあげる。園庭にアメンボが来るのは初めてで、子どもたちが集まってくる。Ｙさんが「どこから来たんだろう？」というと他の子どもが「ここで生まれたのかな？」「歩いてきたのかな？」と推測を始める。虫好きのＨさんが「蚊みたいだから飛んできたんじゃない？」というとみんな顔を近づけて観察する。「本当だ！羽がある。」と飛んできたことに納得する。すぐに捕獲作戦が始まり、大きな容器を持って池に入りあっという間に全部捕まえた。ケースに入れて「やっぱり蚊みたいだ。」としばらく観察してから逃がしていた。

連日アメンボを見に行くようになった。ボウフラ対策としてメダカを入れたが、メダカよりアメンボに夢中である。日を追うごとにどこからともなくアメンボは飛んできて数が増えていった。

５月初旬、年長の Ｗ さんが池に来ると「アメンボが交尾している！」と発見する。二匹が離れないように捕まえて観察している。Ｗさんはみんなにも「卵産むかな？」と嬉しそうに見せる。それを聞いたＯさんはアメンボが蚊の仲間だと思っていたので、「じゃあアメンボになる前にメダカに食べられちゃうの？」と心配している。それからＯさんは連日「アメンボ生まれるかな？でもボウフラいないな。」と池を観察している。交尾から２週間経った頃、Ｏ さんがいつも通り池に行くと、「これ、アメンボの赤ちゃんだ！」と１ミリ程のアメンボを数匹見つけ、驚きながら友達に知らせる。「よかった。小さくてすごくかわいい。」と Ｏ さんはアメンボを嬉しそうに眺めていた。その後、少しずつ成長するアメンボを嬉しそうに日々観察している。

考察：園庭に池という新しい遊び場が生まれ、楽しそうに橋を渡る姿だけでも環境が少し豊かになったことを感じた。そして、用意をせずとも自然に水辺の生き物が来たことから、園庭に革命が起きたと保育者は感動した。アメンボは、今までバスで向かっていた緑地にもいたが、クワガタ・トカゲ・カエル・ザリガニの陰に隠れ、関心があまりなかった。今回は園庭にアメンボという驚きの状況が子どもたちの関心を高めさせたのだろう。そこから“生き物とどのように出会うか”ということの大切さを知った。子どもたちがアメンボの姿をよく観察し、身近な存在である蚊と比較して、アメンボの生態を推測したり、継続して観察することでアメンボはボウフラにならず小さいアメンボとして生まれてくることを知った。日々興味をもって観察する中で、アメンボについて学ぶことができた。O さんはずっと待っていた“生まれたばかりのアメンボ”に会うことができてその可愛さに心動かされていた。これまでの園外保育の中では見られなかった姿だ。日々の観察から小さな変化を見ることができたからこそ、その生き物への理解が深まり、そこにある感動や愛しさに気づくことができていた。

保育環境の工夫～生き物も子どもの興味も守りたい～

子どもたちが保育者の目を気にすることなく、思う存分に池で生き物と触れ合ってほしいと考えていた。小さな池に多くの子どもが自由に入ることで生き物の住処が壊されてしまうことや、水に入る楽しさが勝ってしまい、じっくり生き物とかかわることができなくなってしまうと感じた。また、自由に行くことができるということは水による事故のリスクも考えなければならない。そこで職員で『子どもたちが安全かつ自由に生き物と触れ合うことができ、生き物たちの住処を壊すことがない蓋』を考え、制作した。これにより、最初の目標を達成することができたと同時に、生き物を捕まえるための難しさが上がり、子どもたちが協力をしたり、様々な道具を工夫して使うようになり、一層夢中になるという想定外のメリットも生まれた。

枠

枠は子どもが歩いても壊れない強度になっている。さらに池の中央部にも手を伸ばしたり上から池の中を見られるようになっている。

網

網目は頭や胴が入らない間隔。
手を入れることができ、色はできるだけ存在感のない色を選んでいる。
乗っても壊れない強度。

エピソード２　『今日もザリガニを捕まえようぜ』（年中児・年長児）５月～６月

５月の始めに保護者からザリガニを譲り受けて池に入れることになった。その噂は瞬く間に広がり、「池にザリガニいるんだって。」と沸き立っている。早速、池に行くと年長児の M さんが「ザリガニいた！」と見つけ、全員が集まる。手を出すのが怖いのかしばらく様子を見ている。すると「そうだ！」と K さんがバケツを持ってくるが、池に設置した柵の網目は通らない。それをみて「わかったぞ！」と M さんはスコップを持ってきた。網目からスコップを入れるとザリガニに届くが、「あぁ、だめだ！逃げちゃう！ザリガニってこんなに速く泳ぐの！？」と驚いている。年中児の S さんもスコップを持って２人でザリガニに向けて入れ続けるが捕まらない。３０分して、

※この論文内のザリガニはアメリカザリガニである

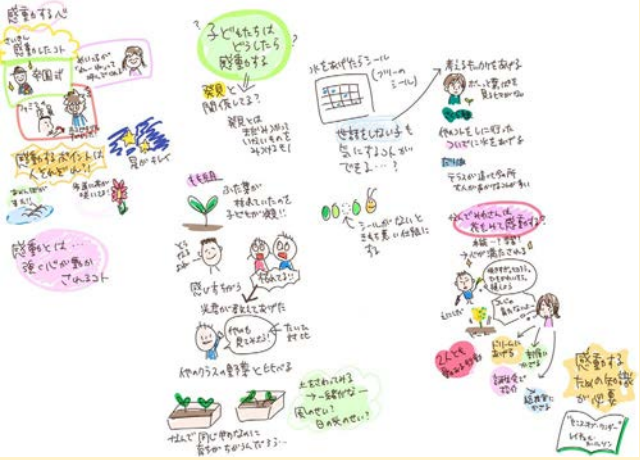
Mさんが「後ろに逃げるから後ろから捕まえてみよ。」とザリガニの動きのパターンに気づく。さらに３０分ほどして「だめだ。後ろからやってもスコップを避けて逃げちゃう」とMさん。それを聞いていたOさんは「後ろに逃げるって、何で後ろに何にもいないってわかるんだろう。」と疑問を持つ。Mさんは「S くん、僕が前から行くから後ろで捕まえて。」と声をかける。その様子を見ていたKさんが「作戦だね！」と目を輝かせる。M さんが前から追い込み、後ろで S さんが待ち受けるが、ザリガニは容易くスコップをすり抜けていく。S さんが「これじゃだめだ！俺が手で行くよ。」と言って、ザリガニの真上に行く。「挟まれるぞ！」と言われるが、S さんは気にせずにザリガニを後ろから鷲掴みにした。M さんは驚きながら「早くバケツにいれろ！」と言うが、その瞬間にザリガニが S さんの手を挟む。周りの子どもが驚いて声をあげるが、Sさんは焦らず、挟まれている手を静かに池につける。すると、ザリガニはハサミを開いて静かに池に戻っていく。Sさんが「はぁ、痛てぇ。」と笑っている。みんなは開いた口がふさがらないままSさんを見ている。「ザリガニは水に帰りたいだけだから。」と冷静に言うSさんには後光が射して見える。Sさんは何事もなかったようにまたザリガニを探し始める。

考察：ザリガニの飼育をした経験がある子どもはいたが、池の中で見え隠れするザリガニを自由に追いかけまわして遊ぶ経験をしている子どもは少なく、後ろに猛スピードで泳ぐなど野生に限りなく近い本来のザリガニの姿に感動していた。飼育ケースで飼うということは自然の極めて限定的な一面を切り取っているに過ぎないという視点を持つことを忘れてはいけないと感じた。本来の力を発揮するザリガニを前に悪戦苦闘し、簡単に捕まらないからこそ、じっくり観察し、傾向を見出し、作戦を立て、捕獲に向け協力する姿が生まれたのだろう。そして最後にザリガニを手で捕まえたSさんの保護者に聞いたところ、家でザリガニを飼育しており、よく触れていたことがわかった。その経験と理解があったからこそ自然に近い姿を見せる池のザリガニに対しても落ち着いてかかわり、挟まれた時にも冷静でいることができたのだろう。このことから“飼育や図鑑などから知ること”と“ありのままの自然から学ぶこと”は両軸で進んでいくことが望ましいと感じた。また、Sさんの冷静な姿を目の当たりにした周りの数人の子どもたちの心から、“触ったら絶対に挟まれるから危険だ！怖い！”と闇雲に恐れる気持ちが消えていった。知ることで恐怖が消えることを保育者も気づかされた。そして“百聞は一見に如かず”。理想を体現するSさんの姿に、保育者も自らの行動で理想を語らなければならないと、身が引き締まる思いであった。

保育者の思う発見や感動　～私には花に感動する気持ちがわからない！～

池の活動が始まった頃に“感動する心”について職員で話題になり、“花に感動する気持ちがわからない”という発言で盛り上がった。話し足りない職員が『腹を割って話す会』に集まる。そこでレイチェルカーソン著『センス・オブ・ワンダー』を読み合わせながら話した。その中で“発見には感動が伴っていることが多い”という意見が出た。そして“発見とは？”と次の問いが生まれた。オンラインの goo 辞書によると“発見”とは『まだ知られていなかったものを見つけ出すこと。また、わからなかった存在を見いだすこと』だと書かれていた。それは私たちがしないように気を付けている、“子どもが様々な事象に出会う前にそれについて教えてしまうこと”は、発見の機会を奪うことであり、　『発見を“※確認にかえてしまう行為』になるので気を付けなければならないということを再確認した。（※オンライン goo 辞書⇒確認：はっきり認めること。また、そうであることをはっきりとたしかめること”）しかし、発見も嬉しい発見ばかりではなく、例えば虫が苦手な子どもが石を裏返すときに“石の裏には大ムカデがいるかもしれない”という知識があることで、生涯虫に怯えて過ごすようなトラウマ体験を避けることができるかもしれない。そういった情報を提供することはあってもいいという意見が出た。

感動する理由は“経験からくるものもあるのではないか”とそれぞれの子ども時代の話になり、現在のイメージとのギャップに驚いたり、共通点を見つけることができ、ふとした瞬間に通じ合えるような互いのパーソナルな部分も楽しく共有できた。感動や発見について改めて考え、価値観をすり合わせる中で、子どもが『自ら発見し、感動する姿』を見守る保育者のあり方について理解が深まった。



エピソード３　『ザリガニなのに赤くないよ』（年少児）５月～６月

年少児も興味を持ち毎日見ている。怖くて触ることはできないが、「ザニガニ？」「怖い。」と言いながら釘付けになっている。すると年長児が目の前でザリガニを捕まえ、「触ってみる？背中触ってごらん？」と差し出してくれる。生き物が好きな H さんはドキドキしながら人差し指で触っている。

この日も H さんがザリガニを見ているとそこに年長児の A さんがきて、「見てごらん。」とザリガニの脱皮した抜け殻を見せる。H さんは不思議そうに殻を見ている。A さんは「あげるよ。」と譲ってくれた。H さんはしばらく

ドキドキ…

殻を見てたが、急に「赤くない。」と言った。“絵本や図鑑で見るザリガニは赤いのに、どうしてこれは赤くないのか？”という疑問を持ったようだ。その抜け殻は確かに薄黒い。それから水道へ向かい、「きっと汚れちゃってるんだ。」と抜け殻を洗い始めた。しかし、洗っても赤くならず、首をかしげながら抜け殻を虫かごに入れ部屋に持って帰った。

数日経って興味は薄れているように見受けられたので、「片付けようか？」と聞くと、H さんは「だめ。」と答え、大切な気持ちは変わらないようだ。連休明け、登園してきた H さんが慌てて保育者のもとにきて「赤くなった！」と虫かごを見せる。そこには確かに赤くなった抜け殻が入っている。連休は暑かったので窓際にあった抜け殻は蒸されてしまったようだ。図鑑に載っている赤さとは違うが、赤くなったことがとても嬉しい様子である。保育者に伝えた後、H さんが「みんなに話したい！」というのでサークルタイムの時間に発表してもらった。これまでの年少の発表は“好きなものや遊び”の話が多く、発見したことについて発表する姿は初めてであった。クラスの子どもたちも H さんが“抜け殻が赤くなってほしい”という思いを持っていたことを知っていたので、興味津々で聞いており、「本当に赤いね！」と喜びを共有している。発表を聞いていた C さんは、後日、家で飼っているザリガニが脱皮すると、抜け殻を持ってきて保育者に「僕もみんなに見せたい。」と言った。

ぼくのおうちのザリガニの脱け殻も赤くなったから持ってきた！

考察：今まで保育室で飼育しているザリガニをケースの外から見ることはあったが、今年度のように、園庭で様々な学年の子どもとザリガニを中心にしてかかわることはなかった。年少児はザリガニを上手に扱う年上の子どもに憧れ、年上の子どもたちも自分たちが上手に扱えることを嬉しく感じている。

年少児であってもじっくりと観察し、図鑑でみたものとの違いに疑問を感じ、“汚れているから赤くない？”と自分なりの仮説を立て、検証しようとする姿に驚いた。最初の問とは少し違う形であったが、“赤くなってほしい”という思いが達成され、理屈を超えて、自然の出来事に感動する姿が見られた。そして、その感動を共感してもらえたことは H さんにとって貴重な経験になっただろう。感動を共有することが、また違う誰かの行動へと繋がったことから共有することの大切さを感じた。

年少児の伝えたい思い～ミーティングの時間の確保～

年少児においては自分の思いや気持ちを人前でみんなに向けて話すということは簡単ではなく、４月から機会を確保してきたが、簡単な保育者の質問やテーマについて話す姿が多かった。その中で H さんは初めてこの感動をみんなに聞いてほしいという感情を持ち、発表することになった。３歳児であっても伝えたい思いがあると信じ、担当保育者は丁寧に「どうして？」「もっと教えて？」と声をかけることで、その時間が自分の思いをみんなに伝えられる時間だと認識され、H さんの発表したい気持ちへと繋がり、他の子どもたちの心を動かしていくことができた。

エピソード４　『試すことについて』（年中児・年長児）５月～７月

Ｓさんの姿がザリガニを捕まえる姿を見て他の子どもたちも掴めるようになってきた。捕まえた後は観察したり、枝を掴ませたりいろいろな実験をしている。この日は、園庭で食紅を使った色水遊びをしていた。Ｍさんや Ｋさんも色水を楽しんでから、ザリガニを捕まえ始めた。Ｍ さんがいつも通りザリガニを捕まえてケースに入れようとした時、Ｋ さんが「あ！待って！」と何かをひらめいて駆け出す。Ｋ さんは先ほど遊んでいた赤い色水が入ったケースを持ってきて、「ここにいれよう！」と提案する。ＷさんやＳさんも「いいね！」と興味津々だ。Ｓ さんがザリガニを色水に入れてみると普通の水に入れた時とザリガニの様子に変わりないように見える。だが、それを見て子どもたちは、「おー！」と歓声を挙げる。歓声に続いて聞こえてきた言葉は「なんかかっこいい。」であった。青や緑の色水にも入れ、「緑より赤の方がいい。」「青は不思議な感じだね」と色ごとに感じる印象を言葉にしていく。

この葉っぱは掴むかな？

考察：子どもたちは色々な場面で“こんなことをしたらどうなるか？”と思いついたことや見聞きした様々なことを試している。試すということについて、私たちは『仮説⇒実証』という手順であると考えていたが、“ザリガニを色水に入れる”という試す行為では、どのような仮説を立て、どのような結果を期待していたのか理解できなかった。その後の「なんかかっこいい」という言葉から、子どもたちは期待した結果を求めていたわけではないと考えた。試す行為には“〇〇をしたら△△になるのではないか？”という何かを実証するためにする行為と“〇〇したらどうなるのか？”という漠然とした試す行為の２種類があることに気づいた。そして今回は後者の試す行為だった。今回のエピソードでの試す行為は、一回目に赤い色水に入れたときは、“どうなるのか”という漠然とした見通しや仮説のない試しであったが、二回目以降の違う色に入れた時には“赤い時にはかっこよく見えたものが緑に入れた時にはどのように見えるのか？”という見通しを持った実験であったと考えられる。つまり、見通しや仮説のない漠然とした試す行為は、その後の見通しや仮説を持った試しへとつながる大切なものであると考えた。好奇心のままに漠然と試す場合に、見通しがないが故に、無自覚に残虐な行為や危険な行為をしてしまう可能性があることに気づく。保育者は子どもの試す行為をよく見極め、深い学びへとつながる“こんなことしたらどうなるんだろう？”という漠然と試す行為を温かく安全に見守る必要があると感じた。

保育環境　～池の隣に田んぼ～

池と田んぼは繋げないで作る予定であったが池の生き物が田んぼに流れ込むことで、稲の周りでも遊ぶようになり、自然と稲の成長に気づく姿が生まれることを願い繋げて作ることにした。

エピソード５　『好奇心と死について』（年中児・年長児）５月～７月

ザリガニを色水に入れる実験以降も様々な実験をしている。W さんはザリガニを芝に降ろして観察している。「ザリガニって水の外でも死なない。」と気づき、ハッとした顔をして「水の中みたいに後ろに跳ぶかな？」と前から枝で突く。「ハサミを上げるけど跳ばないね。」と言いながら突く。他の子どもも「水の中の方が強いね。」「地面より水の方が好きなんじゃない？」と話している。

触りすぎてザリガニが弱ってくると、K さんが「池に戻しておけば？」といって池に戻す。「元気になれよ。」と言って戻されたザリガニが何匹も横たわっている。そのことに子どもたちも気づいているはずだ。保育者は責めないように表情や言葉に配慮しながら、「死んじゃってるのかな？」と尋ねる。すると、M さんが「時々動くんだよね…。」と答える。そして M さんはしゃがみ込んで死んだザリガニを見つめる。そして「ほら、いま手が動いた。」と言う。他の子どもたちも加わり、「寝てるだけかもよ。」「次の日見たらいなかったから生きてたんだよ。」とそれぞれ自分の体験を話す。しかし、体が白く濁り、崩れ始めた死体を見て「これは完全に死んでるね。」と O さんが言い、他の子どもも同意する。そこで保育者が先ほど池に戻した死んだばかりのザリガニを指さし、「これは？」と聞くと、「わからない。生き返るかも。」と答えた。

死についてどう伝えるか悩む間にもザリガニの数は減っていった。保護者から譲り受けたり、保育者が捕まえて入れていたので、絶えずザリガニはいた。しかし、触れる子どもが増えると死ぬ数も増えた。保育者はザリガニの命について何を伝えるか悩む中で、サークルタイムで話し合うことにした。

保育者が「ザリガニって何匹死んじゃったと思う？」と切り出す。「わからない。」「一匹死んでるの知ってるよ。」と答えがくる。実際に死んだ数と子どもの認識とのギャップを感じ、池に入れた数だけ紙にザリガニの絵を描いてみる。すると紙が埋まる程の数だと分かる。そして、「今何匹いる？」と聞く。「私が２匹捕まえたでしょ？」「僕も２匹だよ。」と数え、「じゃあ４匹かな？」と答えた。そこで「他にもいるかもしれないけど、じゃあ４匹以外×をつけるね。」と印をつけていく。３０匹程いなくなったことがわかり、表情が曇る。「こんなに？かわいそう。」という子ども。ザリガニに関心のなかった Q さんであったが「触らない方がいいんじゃない？」と言う。ザリガニが好きな子どもは「でも捕まえたり、触ったりしたい。」と答える。「死んでもいいの？」と尋ねられ、M さんは「毎日触られたら嫌かも。疲れて弱っちゃうから休ませてあげる。」「優しく触る。」と言う。S さんや K さんも「ザリガニの気持ちを考えてあげる」と、どうしたら死なないかということを考えていた。

よく見てると
時々動くんだよ…。
ほら、ハサミが動いた

あー、これは
完全に死んでるね…
もうだめそうだもん。

考察：水中のザリガニ本来の動きを知り、“陸での動きはどうか？”と好奇心に突き動かされ試す W さん。他の子どもも同様に興味を持ち、ザリガニがどんな力を持っているのか、どんな反応を見せるのかと目を輝かせていた。しかし、子どもたちの好奇心と引き換えにザリガニが死んでいくこともまた事実で、好奇心を満たすために失われる命があっていいのか。あってはいけないのだが、子どもの好奇心とザリガニの命を両方守るための方法が見つからず、声をかけずにザリガニが死んでしまったり、強く声をかけすぎて保育者の目が気になり、夢中になって遊ぶことができなくなる姿もあった。

多くのザリガニが死んでしまったことが明らかになり、子どもはもちろん保育者もその数に驚いた。故意に殺されたザリガニがいないことはわかっている。もっと知りたい気持ちの果てに死んでしまっているのだ。また、子どもたちにとって死んでいることを明確に判断することが難しいことも原因の一つだと感じた。身体が崩壊し始めて『完全に死んでいる』と判断できるということは、かかわりながらザリガニの状態を把握して弱わりそうだと判断することも難しいだろう。触ることはやめずに、死なないようにかかわると約束した子どもたちがどのようにザリガニとかかわるのか大変興味深い。

保育者の悩み～命というテーマの難しさ～

ザリガニがいなくなった数を可視化したことで、保育者自身も無責任にザリガニを入れてしまっていたことに気づき反省をした。ただ、職員で話し合う中で、アメリカザリガニが緊急対策外来種と認定されていることで、無意識のうちにその命を軽んじていないか？という疑問が上がり、認定されているとしても、それによって一つ一つの命を軽んじることはあってはならないと考えた。人間の都合で連れてこられ、増えたからと言って殺されている現実、人間の都合とそこにいるザリガニの命の尊さは無関係であることを肝に銘じ、まず保育者自身がしっかりと考え、その上で教えるのではなく、常に子どもたちと一緒に考えていかなければならない問題であることに気づくことができた。

エピソード６　相手の視点に立ってみる（年中児・年長児）５月～７月

話し合い後。ザリガニに関心がなかった子どもほど「触らないんじゃないの！？」という姿がある。いなくなった数の多さにショックを受けたのか M さんたちも触ろうとしないが、触りたい気持ちが背中から伝わってくる。

数日していつも通り捕まえる姿があるが、聞こえてくる言葉は違っている。「捕まえたぞ！ケース持ってこい！」と S さん。よく見るとケースがくるまでザリガニを水につけている。ケースに入れた後も「そろそろ水換えてやろうぜ！」と M さんは気にかけている。W さんが「見ろ！ハサミが小さいぞ！」と見せると「ザリガニはハサミが取れたらまた生えてくるんだよ！」と K さんと二人で興奮している。それを見た S さんが「ハサミを治してるところなら返してやるか？ケガの時に触られたら痛いだろ？」と言う。「僕も手を思いっきりケガしたことあるよ。」と言いながら池に返すＷさん。ザリガニの視点に立ち自分の経験と重ね合わせながら考える姿が見られた。

ちょっと
まっててね

考察：エピソード５で、ザリガニが水の中の方が好きだと知っていた S さんは、できるだけ外に出す時間を減らそうとしたり、飼育を通して水を替えることがザリガニにとって良いことだと考えた M さんは、水を替えることを提案していた。触りたい気持ちと同時に、ザリガニの気持ちを考える姿が見られた。実際に気持ちはわからない中で、「ケガの時に触られたら痛いだろ？」と自分置き換えて考えようとしていた。「触らなければいい。」とザリガニにとって良い選択をしているのは、“その世界に興味がない人”で、“ザリガニの気持ちを考え、深くかかわろうとした人”がザリガニを傷つけているという矛盾について私たちは頭を抱えた。この矛盾について私たちが唯一考えられたことは、“もし世界からザリガニがいなくなってしまう”となった時に立ち上がるのはきっと触れ合った子どもたちだ。興味のない世界のことについて、聞いた知識だけで正しいことを主張することは簡単である。しかし、関心が高く好きだからこそ、相手の世界に踏み込みすぎて失敗してしまうことはあるが、その中で自分の気持ちと相手の気持ちを必死に考え、付き合っていこうとする。その先に本当の共存があると私たちは考えた。

保育者の存在～いつかはもっと横並びの存在に～

私たちは日常の中で子どもを注意することがあるので、子どもたちの中に“怒られるからしない”という行動が生まれてしまっている。今回のエピソードでも、保育者の前で見せる“建前の行動”ではなく、本当の姿を見るために、見守る距離についてとても気を遣った。もっと横並びの関係になれるように、日常の中でも“保育者－子ども”が“見る―見られる”という関係にならないように過ごしていきたいと話し合った。

エピソード（番外）　『池が大自然と同じ存在のように』（年長児）６月～７月

６月頃にはザリガニ以外にもアブラハヤやエビなど生き物が増えてきた。W さんは「この池にウナギとかカメもいるかな？」と目を輝かせて探していた。それを見て保育者は“どう見てもこの池にはいないのでは？”と感じていた。

７月の中旬のお泊りキャンプの時に磯遊びをした。竿を手にハゼを何匹も釣り上げる W さん。「ハゼがいっぱい！マグロとかもいるんじゃない？」と期待を膨らませている。保育者が「どうかな？」と答えると W さんは「きっといるよ！」と楽しそうに釣りを続けた。保育者は W さんが池で遊んでいる時にも同じようなことを言っていたことを思い出していた。キャンプ後に思い出を絵に描いた。W さんは磯遊びの時の絵を描いており、水中の様子が描かれている。そこには水中で楽しそうに泳ぐたくさんの生き物が描かれていた。

大物を釣るぞー！

夢いっぱいの海

考察：園の池は職員にとって内訳がわかっており、大きな水槽のような感覚である。しかし、W さんは池でも海でも目を輝かせながら「今度は何が見つかるか？どんな生き物がいるのか？」とわくわくし、想像を膨らませている。キャンプの思い出として描いた W さんの海の絵には楽しそうな水中の世界が広がっていた。W さんが池と海で同じような言葉を口にしたことから、あの海と同様に池も楽しい世界に見えていたのかもしれない。“自然が与えてくれる感動をもっと身近にしたい”という願いが実現に向けて少しずつ進んでいると感じる嬉しい出来事であった。

Ⅱ．野菜の栽培をもっと身近で

４年前から３階テラスの畑（１０畳）で、野菜を育てる活動をしていた。育てるための条件は良いが、子どもの生活同線上になかったので、“保育者と一緒に行く時間”でしか観察ができない状況であった。何度も、「野菜がどうなっているか見に行きたい！」と言われても、「ごめんね。今はいけないんだ。」と断らなければならないことがあり、子どもが“今見たい”と思っているのに、その瞬間に見に行けないことが残念であると職員は悩んだ。そこで今年度は各クラスのテラスにて、**プランター栽培**を行うことにした。

・エピソード７　『治るといいね』（２歳児）５月～７月

育てたい野菜を聞き、2 歳児ではキュウリと枝豆に決まる。「どっちがきゅうり？」「きゅうりないよ？」と見分けがつかなかったり、“苗”ということがわからない子ども、「白いつぶつぶ何？」と土に興味を持つ子どもがいる。また遠くから見るだけの子どももいる。植え終わると、土に触りたくなった E さんも水やりをしている。保育者が「みんなみたいに名前をつけてあげる？」と尋ねると候補の中から「きゅうりん」と「まめちゃん」に決まる。

毎日の水やりを楽しみにしている子どもたち。水やりの最適なタイミングや量もあるが、子どもの気持ちを優先した。葉が増えてくると G さんは「きゅうりんとまめちゃん、葉っぱが違うね。」と実際に触れて違いを「ふわふわ」と「冷たい」と表現する。この頃、公園に行くと雑草にも「大きくなってね。」と水をあげており、植物への優しい気持ちが広がっているようだ。

数日して花が咲いたのも束の間、花は枯れてしまう。悲しむ E さんであったが枯れた花の場所に小さなキュウリを見つけ、表情は一変し「キュウリの赤ちゃんだ。」と大喜びでみんなに伝える。

ある日、保育者がきゅうりを見て「うどんこ病だな。」と呟くと、「なに？」と E さんが聞き返す。「葉っぱが違うところわかる？」と尋ねると「ここ、しろい」と変化に気づく。「これはきゅうりんの病気なの。」と伝えると E さんはその葉を「早く元気になってね。」と優しく撫でていた。

考察：遊ぶ場所にプランターがあることで日々観察し、二つの野菜を比較し、その違いを肌で感じて関心を深めている。興味を持って観察することで極めて小さいキュウリを見つけることができ、大きな喜びに繋がっていた。野菜が病気になると、大人や 4,5 歳児は原因と対策を考えることが多い。しかし、病気の葉を撫でる E さんは、受けている愛を植物にも分け隔てなく与えており、アニミズムの世界にいる２歳児特有の姿であるが、この原体験が生涯に渡る植物に対する愛しさに繋がっていくと考えた。

保育者の工夫～写真だから伝わる楽しさもある～

最初は野菜の栽培に興味を示していなかった子どもたちも、自分のタイミングで部屋に掲示していたドキュメンテーションを見ることがあり、その時に友達や保育者と野菜について話すようになった。そして興味がなかった子どもたちもテラスに出ると自分から水をあげるようになっていった。

・エピソード８　野菜が好き（年少児）４月～６月

３歳児ではトマトとキュウリを育てることになった。畑では保育者が代表として植えていたが、今回はプランターを囲んで土を入れるところから子どもたちと行った。二つの葉を見比べたり、土に入っているものに興味を持ち手に乗せている。植え終わると窓からよく見える場所に置いた。

野菜に興味を持てない子ども多く、昼食にキュウリが出ても苦手意識が強く、敬遠する子どもが多い。そこで私たちは“栽培活動によって野菜を好きになる”という側面と“野菜を好きになり、栽培活動にも関心を持つ”という両面からこの栽培活動を考えた

野菜スタンプ　　**再生野菜**　　職員自作“**野菜スープの歌**”　**今日の野菜は何かな？**

上記の活動によって、苦手意識が強かった子どもの野菜への関心も高まり観察する姿が増えた。キュウリが大きくなってくると、F さんが「この前ママが買ったキュウリもこれくらいだったよ。」というので収穫することになった。初めて収穫したキュウリを自由に触れられる場所に置くと、触れながら「ちくちくするね。」「私の手よりも大きいよ。」と友達と感想を話している。Z さんが匂いを嗅ぐと、「キュウリの匂いしない。」と不思議そうに言う。周りの子どもも嗅いでみると「本当だ。匂いしない！」と驚く。そこへ、A さんがお気に入りの人形で「こんにちはキュウリさん。大きくなったわね。」と挨拶をしている。キュウリをじっくり見ていた P さんは自由帳を出してキュウリの絵を描き始めた。キュウリに触りながら「キュウリってこれくらいの大きさだよね。」「ぶつぶつしてるね。」と話しながら絵を描いている。それぞれのやり方で収穫の喜びを表している。

考察：人形遊びの仲間に入れたり、絵を描くことで収穫を喜ぶ姿には驚いた。キュウリを緑で塗り潰さず、触れた質感を表現したことから P さんの感動が伝わる。野菜に関心を持てるように様々な方法を試みたことで、野菜を“食べる”“美味しい”“身体にいい”だけではなく、“楽しい”“面白い”と存在自体を愛する心が育まれていた。“野菜は好きだけど食べられない”という新しい価値観への気づきであった。

保育者のねがい～楽しさをもっと保護者と共有したい～

このクラスでは子どもたちが強く興味を持ったことを大きな模造紙にまとめて掲示している。子どもの言葉だけではなく、保育者の思いや言葉かけの意図も記入するようにしており、保護者の方に対して、保育のねらいや活動の繋がりを伝え、遊びの中でどのようなことを考え、学んでいるのか共有し、一緒に楽しみたいと考えている。

・エピソード９　『なんで倒すの？』（年中児・年長児）６月～７月

　ある日、ゾウガメを見ていたＤさんが「え、ネズミだ！」と叫ぶ。そこには確かにカメの餌を取っていくネズミがいる。「駆除しないといけないな。」と言うとＤさんは「なんで？」と聞く。危険性について伝えるが、Ｄさんや周りの子どもたちは「かわいいのになんで倒しちゃうんだろうね。」と納得できない様子であった。

　他のクラスが野菜の収穫を迎える中Ｄさんのクラスでは、鳥に食べられてしまうようで収穫できずにいた。毎日水やりをして収穫を楽しみにしているＤさんは「他のクラスは収穫できていいな。僕たちのトマトはせっかく毎日水をあげているのに赤くなると鳥たちが食べちゃうんだもん。」と言う。ちょうどその夕方にＤさんが窓際にいると、プランターの中にネズミがいるのを見つける。今までは鳥に食べられていると思っていたが、実はネズミによる被害であったとわかる。食べていたのがネズミだったことへの驚きが大きく、「ネズミだったんだ。」と追い払うことも忘れて見入っている。

　次の日、トマトを見ると根元にバケツが置いてあり、それはＤさんがネズミを捕まえるため友達と置いた仕掛けだとわかる。ネズミが入る様子はないが、「捕まえたらどうする？」と聞くと「バイ菌があるから飼えないよね。」と悩み、「でもトマトを守らないとね。」と葛藤している。その後保育者が対策をしてネズミはいなくなった。トマトを食べられることがなくなり安心したＤさんであったが「ネズミ可愛かったけどね。」と寂しそうな顔をした。

考察：ネズミの危険性ついて何度も話したが、中にはハムスターを飼っている子どももおり、“なぜネズミは駆除しなければならないのか”という声も聞かれた。しかし、実際に被害にあったＤさんのクラスでは、ネズミは“かわいい”が“大切な野菜を食べてしまうことがある”というひとつのものの中に多様な側面があることを知り、考えが深まっているように見受けられた。

保育者の思考錯誤～自然と導かれるような環境づくり～

　野菜の成長が緩やかな時や変化が分かりにくいほど関心が薄れやすく、他の遊びに夢中になって忘れてしまうこともあったので、わずかな成長にも気づいて関心が高まるように、集うためのベンチを配置したり、計測表を作るなど環境の工夫を行った。

・ベンチの設置

　プランター傍にベンチを設置することで、そこに座ってプランターを眺めて、発見を楽しむ姿が生まれた。

・オリジナル計測表

　『語ら場』の中で個人の稲を育てるという新しい試みにおいて稲の成長の経過が分かりにくいという課題が共有され、計測表を作成。色・イラスト・数値で大きさを測れる。身長も測れるように上限を決めたことで、互いに身長を測って遊ぶなどして、高さに対する関心も高まった。

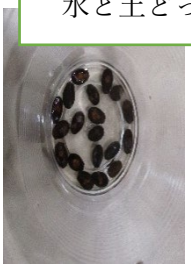
・エピソード１０　譲れない思いから（年中児・年長児）５月～６月

プランターに植える野菜が多数決で決まった後に、U さんが保育者のもとに来て、「私は絶対にアボカドがよかったのに。」と言う。そこでＵさんと育て方を調べ、水耕栽培で育てることになった。次の日に保育者はアボカドを持ってきた。アボカドを食べたことがある子どもたちも緑だと思っていたようで、調理されていないアボカドが黒っぽい皮に包まれていることを知って驚く。目の前でアボカドを切ると皮の中に鮮やかな緑が見えたことで歓声が上がった。嗅いだり触れたりしており、味に興味を持ったＴさんがどんな味か、U さんに尋ねると「甘くてクリームみたいだけどキュウリみたいな味だよ。」と答えるがピンとこない様子であったが、子どもたちは増々興味を引かれていた。U さんと種を取り、『くり』と名付けて、水耕栽培を始めた。

数日後、T さんも気になってアボカドを食べたことをサークルタイムで話し、味については「外国の味。メキシコ産ってママが言ってたから。」と言う。やっぱり味は伝わらない様子である。T さんは種を持ってきて「僕もアボカドを育てる。」と栽培を始め、「メキシコ選手の名前から『アンビッシュアボカド』にする。」と父親と決めてきた名前をつけた。保育室の入口に並ぶ３つのアボカドが保護者の目に止まり、「これアボカドだよ！私も食べたい！」と会話が生まれ、続々とアボカドの種を持ってくるようになる。

また数日してＮさんがサークルタイムの時に「僕は昨日食べたスイカの種を育てたい！」と言う。土耕と水耕で悩んでいたので、両方試すことを提案したところ毎日どちらから発芽するか楽しみにするようになった。

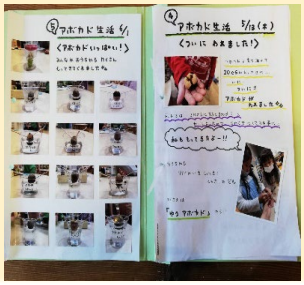
水と土どっちかな？



考察：アボカドの栽培は計画になかったが、計画をベースに広がっていくそれぞれの思い、今回であれば U さんの熱意を支えることで周りの子どもの心にも火が付き、アボカドブームが起きた。そして N さんの“自分も好きな野菜を育てたい”という気持ちを生み、アボカド以外にも関心が広がっていった。また保護者から「家でもアボカド育て始めました。」「私の勤める園の入り口でもアボカドを育て始めてみました。」という声が聞かれ、U さんの関心が瞬く間に広がっていくことに驚きを覚えた。

保育者の心構え～計画に縛られずイレギュラーを楽しむ～

計画は子どもの“やりたい”が生まれるためのきっかけである考え、それに縛られることなく、様々な興味・関心をいつでも察知できるように心がけた。さらに、その物語りを写真付き記録として掲示することで、思いはより強く鮮明になり、予想もしない素敵な物語りへと繋がった。



・エピソード１１　『それぞれの工夫』（年中児・年長児）５月～８月

アボカドの変化は緩やかで１か月ほどは何も起きていなかったが、いろいろな栽培方法に興味を持ち始め、その中で再生野菜にも興味を持ち、家庭から野菜の切れ端を持参し、育てる姿が見られた。その中で野菜を逆さまにすると早く成長するという噂があることを保育者がすると、U さんや T さんが「アボカドも逆さにしたら早く成長するのかな？」「水は多いのと少ないのはどっちがいいのかな？」と考え、どうしたら自分の種が早く芽が出るかということを考える姿が生まれ、様々な試行錯誤が起こった。

下の向きにする

・上向きと下向き

しばらく経っても根が出てこず、上向きにした種から先に根が出たため**効果なし**

T さんが「水が飲みたくて根っこを出すのに、逆さまにしたらかわいそう。」

根が出るのを待たずにアボカドの成長の仕方から推測して実験中止。

水をつける位置

・剥いた２個と剥いてない２個

剥いた２個が先に根が出る。

「剥いた方が

早く水が飲めるのかな？」

効果あり◎

皮を剥く

・ちょっとだけつける派６個

・どっぷり水に入れる派２個

※WEB 上にはどれもちょっとだけつけると書いてある。

「たくさん水につけた方がいいに決まってる！水が欲しいんだから！」と主張したが、水に完全に入れてしまった２つは根が出ず変化しない。

ちょこっとがよい◎

結果：

種は上向き	皮を剥く	おしりをちょこっと水につける

以上の３つがアボカドを早く育てるために一番良い方法であると結論付けた。

早い方法を試す中で、「同じ方法で一緒に始めたのに私の方が遅い。のんびりさんなのかな？」と個体差があることを感じる姿もある。一番最初に植えた U さんの種からは根がどんどん伸びていた。しかし数日して、U さんが「私の種が割れちゃった…。大丈夫かな？」と心配している。他の種は割れていない様子。他の子どもも「私の種も割れたらどうしよう。」と心配し始める。心配しながら T さんが種を見ていると割れ目に丸いものがあることに気づく。「もしかしてこれが伸びるのかな？」と希望が見え、２日すると期待通りひょろりと芽が伸びた。T さんはもうダメかと不安でいっぱいだったが、無事に伸びた芽を見て安堵の表情を見せ、他の子どもも「自分の種も早く割れないかな？」と楽しみにするようになった。

考察：このエピソードの結果は自分で持ってきた大切な種を、それぞれ最善と思う方法から得たものである。つまり、水につけすぎて育たなかった種も逆さまにして初根しない種も客観的に冷静に見守っているのではなく、“自分の種が育たなかったらどうしよう”と心底ドキドキしながら見守っていたのである。“自分の大切な種”を育てる中で、正解と思われる情報を鵜呑みにするだけではなく、自分なりの考えや周りの情報に最大限にアンテナを張って考えることは現代を生きる私たちにはとても大切な力だと感じた。

影響される保育者～楽しいはどこまでも広がる～

このクラスでブームになったアボカドや再生野菜。そのクラスの担任が休憩室で楽しそうに話す姿を見て、他の職員も「私も家でニンジンの再生野菜始めたんだ。」と広がる。それからその職員が自分のクラスでも始め、いろいろなクラスで再生野菜がブームになった。子どもの楽しいは自然と大人にも広がっていた。

・エピソード１２　『美味しさを伝えたい』（年中児・年長児）７月～８月

試行錯誤の末に、大きいものは３０㎝以上成長し、葉も増えた。Ｔさんはアボカドの葉を見ながら「公園にある葉っぱと違う。」と話している。公園でも色々な葉を見て、「やっぱり違うな。」と言っている。尋ねてみると「アボカドの木が見たくてアボカドと同じ葉っぱの木がないか探してるの」と答えた。

ＬさんとＵさんは先に芽が出た２つのアボカドを見ながら「なんで同じアボカドなのに色が違うんだろう。違う木になるのかな。」と茎の色が違うことに疑問があるようだ。買った店も値段も違うことを伝えると、「同じアボカドだけど違うアボカドなんだぁ。」と何かに納得している様子だ。「他のアボカドは何色かな？」と他のアボカドの茎の色を見ることを楽しみしている。

プランターの野菜が収穫を迎える中で、「アボカドはいつ食べられるの？」と気になりだした子どもたち。サークルタイムの中で保育者と一緒にスマホで調べると、重大な事実が発覚する。収穫まで平均的に５～１０年かかる。「私たち食べられないじゃん。」と落胆する。さらにそこに載っていたアボカドの木の写真をチラッとを見た子どもが「あんなに大きな木になるの？この部屋じゃ無理だ。」と悩み始める。植える場所は園庭に決まったが、自分たちは食べれないという問題の答えが出ずに重苦しい空気の中、Ｕさんが「今、０歳の赤ちゃんなら食べられるかな？」と言う。さらに「赤ちゃんたちにもアボカドが美味しいっていうことを教えてあげたい。」と続けた。周りの子どもたちも「それいいね。」と納得し、重い空気が晴れ、今の乳児が大きくなったら食べてもらうことが目標になった。エピソード１１以降子どもたちは種をたくさん持ってくるのだが、その種類はリンゴ・桃・レモン・梨など木になるものが多いことを伝えると、子どもたちは大真面目に「じゃあ園庭をフルーツの森にする！」と答える。その為に今は早く種を育てる方法を研究中である。

考察：野菜の成長と比べてアボカドの成長は緩やかで、子どもたちは待ちに待ってようやく出てきたアボカドの葉を、毎日嬉しそうに眺めていた。それ故に葉に対する関心が高まり、アボカドの木を知るために同じ葉を探すことを選んだのだろう。他の野菜を育てている時には生まれなかった反応であり、育てる種類によってこんなにも子どもの姿が変わることに驚き、“植物の種類×子ども＝物語りの数は無限大”だと感じた。Ｕさんの思いを支える中で、“育てる⇒収穫⇒食べる”という枠を超え、“後世のために育てる”ことに発展し、『フルーツの森を作る』という物語りが紡がれ、子どもも大人も日々成長を楽しみに過ごしている。

保育者の悩み②～スマホで調べていいのかな？～

エピソードでも“スマホで調べて”と言われ、とても悩みつつ調べた。それは自ら発見する感動や育ちを阻害する可能性もあるが、今回のように目標がわかることでより意欲的になる場合があることを知り、身の周りに情報が溢れる現代において、取捨選択をしながら“**自らの考えを持って**”進むことも大切な方法だと感じた。

5．まとめ

・『自然が与えてくれる感動をもっと身近に』というテーマを持って取り組んできた。池づくりは“新しい試み”で、プランター栽培は例年の畑の野菜の栽培活動を“見直す”ことから始まった活動であった。

今までバスに乗っていかなければ触れ合うことができなかった生き物やザリガニと毎日触れ合うことで、捕まえて嬉しいだけではなく、“昨日はこれを試したから今日はこれを試したい”と子どもたちの中で経験が積み上げられていく姿が見られた。そこで自分事として命というテーマに向き合い、相手（ザリガニ）に自分を重ねて理解しようとする姿も見られた。

栽培の活動では、畑は保育者と一緒に行かなければならない場所にあり、好きな時に見に行くことができなかった為、実がなって１日か２日して気づくことも多かったが、プランター栽培では、午前はなかった野菜になる小さな膨らみを午後にみつけることができるほど小さな変化を感じることができ、その発見を喜ぶ姿も見られた。さらに、こういった年間で予定しているスケジュールだけではなく、それをベースにして生まれてくる子どもたちの興味・関心やアイデアを丁寧に支えていくことで、保育者の予想もしないような物語が生まれ、子どもたちが日々わくわく過ごしている様子が見られた。また今年度からサークルタイムを再開させたことで、子ども一人一人の思いが共有され、それに共感する友達が集まり、共通の目的に向かって協力する姿も見られるようになった。

また、職員においても子どもの姿や自分の考えを語り合う中で新しいアイデアが生まれた。今まで慣習として行ってきたことや疑問に思っていたことの意味を問い直し、現在の状況にあったものへと変化させていくことができた。

6．今後の展開

今年度は池づくりやプランター栽培など“こんなことできたらいいな”と思いながら“できずにいた”ことを少しずつ行動にできている。その原動力は、“語ること”である。子どもたちと同じように職員同士も一人一人の思いがつながって初めて大きな力になることを感じた。今後も語る機会を大切にしていきたい。

語り合いを大切にした結果、念願の池を作るという大きな前進があった。しかし、生き物たちはそこで繁殖しているわけではないので定期的に捕まえて入れたり、人工飼料を入れなければ死んでしまう。まだ生態系のサイクルが成り立っていない、不安定で不自然な環境である。

子どもたちがザリガニと密に関わるようになったこの年に、日本においてアメリカザリガニが特定外来生物として指定されるかもしれないという話が出ている。これを機に生態系について子どもたちと一緒に学びながら、園のザリガニの飼育についても考え、池もより本物の自然に近いものにしていきたい。

7．終わりに

今回、“池の作り方・管理の大変さ”や“職員の語りを増やす方法”について、この幼児教育支援プログラムに参加されている先輩方に ZOOM などを通してたくさんのご助言いただいたことが大きな推進力となっていました。また、FB の『乳幼児のための「科学する心」ネットワーク』に参加させていただき、皆さんの実践を拝見したり、自分の実践を気軽に投稿し、そこに共感の言葉や助言をいただけることで一層保育を深めることができるようになりました。これからも狭い世界に閉じこもることなく、多くの保育実践者の皆さんから学び、自らも発信する中で、日々前進して行きたいと思います。このような学びの機会をいただいているソニー教育財団の皆様に深く感謝申し上げます。

そして犠牲となってしまったたくさんのザリガニさん
多くの学びと感動をありがとうございました。

◎研究メンバー

・高島美和子・石井里香・篠原光・牛田悠杏
・田中宏忠　・武藤晴菜・前島彩香

◎執筆者
　田中　宏忠